第５章　倭名論結び

我が国の「倭国名」研究は、今もって、中国正史の”管理下”にあると言えよう。
『後漢書』が「台」と言えば「台」となり、『紹熙本』が「壱」と言えば「壱」となり、『御覧魏志』が「台」と言えば「台」となる。

内藤湖南：邪馬壱は邪馬台の訛なること言ふまでもなし。『梁書』『北史』『隋書』皆台に作れり。
古田武彦：「邪馬壱」の壱は中国天子に対する二心なき忠節という特別な字義だ。

全ての研究者は、「台」か「壱」かのどちらかを選択し、その正当性、その唯一性、その絶対性を主張する。だが、このような本質以前にそれぞれは実在する。実在とその実在理由を相対的に研究することが必要と思われる。

「倭」

中国正史に最初に現れるのは「倭人」である。後漢の班固の撰んだ『前漢書』に次のように書かれている。

楽浪海中倭人あり。分かれて百余国となる。歳時を以て来り献見すという

「倭人」は中国語である。何故、「倭人」となったのであろうか。
その後の正史は、この「倭」を継承して、「倭人」「倭国」と表記する。「倭」は班固が勝手に作った名称ではないと思われる。「倭人」と書く根拠があったはずである。それに関しては諸説ある。いずれにしても、当時の我が国からの使節が語った日本国名によると考えられる。
漢は、当然、国の名を聞いたに違いない。漢は我が国の使節が言った国名を以て、「倭」と表記したと考えるのが最も自然であろう。

では、その日本語音として、「倭」はふさわしかったのだろうか。「倭」は中国語では「非常に小さい」という意味である。「倭国」は小国、「倭人」はチビという意味となる。
「倭」は我が国の使節が言った日本語音の漢字表記だとして、それがふさわしいかどうかといえば、ふさわしくない。誰でもそう考えるであろう。では、いかなる漢字が適当なのか。

その前に、我が国の使節は日本語で何と言ったのか。国名を何と言ったのか。つまり、前漢に使節を送った国は、どの国だったのか。
まず、考えられるのは「姫」である。この推測には根拠がないことはない。

卑弥呼連邦２２国の中に「鬼国」がある。「鬼国」の成立は紀元前５世紀、「呉」の王家一族「姫氏」による建国である。本来は「鬼国」ではなく「姫国」である。この「姫国」が倭国（３０連邦）の始原の国である。「姫人」は中国語を話す。使節を送ったとすれば、この姫氏の国が第一候補である。
「姫国」が前漢に使節を送った。当然、「姫」と名乗った。前漢はそれを聞いて、「姫人」と表記せず、「倭人」と表記した。このように考えることができないであろうか。
「漢への使節は姫の人である」という認識に立てば、「倭人」とは「姫人」である。日本語としてふさわしいのは「倭人」ではなく、「姫人」である。「姫」は「紀」として、例えば「紀州」「紀貫之」として今日まで伝わり、「姫氏」は、例えば「岸」「吉志」「喜志」として今でも人名、地名と

して存在する。
だが、漢が「姫を聞いて倭とした」と想定するのは二つの音がかなり似通っていなければならない。「倭」は「ゐ」に近いと言われるが、「姫」は「ゐ」の音とはかなり異なると思われる。
前漢へ使節を送った国は「姫国」ではない、と思われる。

別の史料から考えてみよう。『後漢書』倭伝は次のように書いている。
建武中元二年倭奴國奉貢朝賀使人自称大夫倭国之極南界也光武賜以印綬
建武中元二年、倭奴国、貢を奉じて朝賀す。使人自ら大夫と称す。倭国の極南の界なり。光武、印綬を以て賜う。

ここには後漢に朝賀使を送った国の名がはっきり記されている。「倭奴国」である。光武帝はこの国の使者に金印を与えた。建武二年(57年)である。この金印は、江戸天明年間、志賀島(福岡市東区)で発見された金印であるとされている。
印文は、陰刻印章(文字が白く出る逆さ彫り)で、3行に分けて篆書で、「漢〈改行〉委奴〈改行〉國王」と刻されている。印文では「倭奴」ではなく「委奴」である。

唐の陸徳明の『経典釈文』にも、「倭もとまた委に作る」とある。
『魏志倭人伝』石原道博編訳

『後漢書』「倭奴」と印文「委奴」は同じと考えられる。後漢に朝賀使を送った国「倭奴国」は「委奴国」と考えてよいであろう。
『東夷伝』は「倭国」と「倭奴国」を区別している。「倭奴国は倭国の一つである」と認識している。では、「倭国の極南の界である」という「倭奴国」とはどこか。
陳寿(233年~297年)の認識は、倭国30国に及んでいた。北は「狗邪韓国」から南の境界「狗奴国」までが倭国だと知っていた。陳寿の「極南の界」は「狗奴国」である。
『後漢書』の「倭国の極南の界」である「倭奴国」と陳寿の「狗奴国」とは明らかに異なる。二つは別国である。

57年の後漢の「倭奴国」とはどこか。
『後漢書』「倭奴国」と印文「委奴国」は同じ国であれば特定できる。
「姫氏」二代目の王「順」は「鬼国」を出て新たな国を作ったと言われる。その国が「委奴国」である。倭国の中で二番目の国で、吉野ヶ里遺跡が「順」の国である。「委奴国」「倭奴国」は吉野ヶ里である。

陳寿は『倭人伝』において、「委奴国」を「伊都国」と表記している。同じ国であるが、その場所は異なる。印文「委奴国」は吉野ヶ里、陳寿「伊都国」は佐賀市である。理由は遷都であろう。
57年の「委奴国」は、三世紀、卑弥呼の時代には佐賀市に移転していたのである。
印文「(漢)委奴国王」と「伊都国王」は同じ王家である。陳寿は「伊都国には代々王が居る」と書き、それを裏付けるように吉野ヶ里遺跡では甕棺に納められた王墓が発見されている。

漢に朝賀使を送った国は「姫国」ではなく「委奴国」だった。このように考えてみよう。
漢の倭国認識が「北は狗邪韓国、南は委奴国」だったとしたら、「極南の界」は「委奴国」となる。
「委奴国(吉野ヶ里遺跡)」は有明海からかなり北上した高台にある。「委奴国」は三世紀には佐賀市に移っている。陳寿はそれを「伊都国」と書いている。「奴」を「都」に変換している。
つまり、「伊都」とは「伊の国の都という意味だ」と陳寿は認識していたと思える。
「伊都」が「伊(国)の都」の意味だとすれば、国名は「伊」である。「委奴」も同じように考えると、「委」が国名、「奴」は「都」である。

祖国滅亡後に九州に逃れてきた呉の王家一族「忌」は一字名の国号を使用した。「忌国」である。二代目の「順」も吉野ヶ里に建国した国に一字名を使用したと考えることができる。「委国」である。
漢への朝賀使は自国を「委（い）」と名乗った。「委（い）」と「倭（ゐ）」の音にはそれほどの違いはない。漢人は「委（イ）」を「倭（イ）」と書いた。不思議はない。

漢人は「委国」を「倭国」と表記し、「委人」を「倭人」と表記した。だが、「委」と「倭」では漢字のもつ意味が異なる。「委人」「委国」の方が良い。よりふさわしい文字としては、「伊人」「伊国」であろう。或いは「委」は「井」かも知れない。「井」の姓の人は熊本市に多い。
「伊」「井」を使った地名、人名は「伊予」「紀伊」「伊達」「伊丹」「伊原」「伊勢」「伊賀」「伊豆」「井村」「井口」「井龍」「井川」「井山」「井伊」等多く現代に伝わる。卑弥呼の跡を継いだ「壱與」は古事記では「伊豫」である。

漢への朝賀使の国の名は「伊国」。その首都は「伊都」。
これが、一世紀、漢が認識していた「倭国」ではないだろうか。

「邪摩惟」

唐の皇太子李賢は、『後漢書』「邪馬台国」に「今名邪摩惟」と注釈している。
「今名」とは「今、人々が使用している名」の意味である。では、どこの国の人か？「唐人」か「倭人」か？つまり、「邪摩惟」は中国語か、それとも、日本語か？
「邪摩惟」は借字である。「邪」「摩」「惟」に中国漢字が持つ本来の語意は無い。もし、中国語であれば、一つひとつに意味ある漢字を使ったであろう。

今、倭国の人々は「邪馬台国」ではなく「邪摩惟」と言っている。

「邪摩惟」は日本語である。だとすると、「邪馬惟」は私たちがよく知る日本語として理解できるはずである。しかも、文字ではなく、「音」を聞いて、日本語として理解できるはずである。
「邪摩惟」の日本語「音」とは何か？「邪馬」は「やま」、「惟」は「ゆい」である。どちらも耳で聞いて意味が掴める。現代漢字で表すとわかりやすい。「やま」は「山」、「ゆい」は「結」である。「山」「結」は私たちに容易に理解できる日本語である。

今、私たちは「邪馬惟」を「ヤマユイ」と読んだが、「ヤマイ」とは読まないのか？孫引きではあるが、大野晋氏が奈良朝の母音について述べられている。

> また、学習院大学の国語学者、大野晋氏は、『日本古代語と朝鮮語』（毎日新聞社）のシンポジウムのなかで、古田武彦氏の、女王国の名は「邪馬壹（壱）国であるとする説を批判して、つぎのように述べている。
> 「ぼくは古田氏のあのヤマイ説はだめだと思います。なぜなら、奈良朝の日本語は母音が二つ連続するものを、そのまま一語として認めることは原則的にしないんですよ。母音の連続ということを奈良朝の日本語は非常にきらうんですね。だから連続する場合には融合して別の母音にするか、さもなければ落としてしまうか、さもなければ間にコンソナント（子音）をもう一つはさむかという三つの方法があって、間にはさむのは例があまりない。たいてい一方の母音を落とすか、二つで融合するかです。母音が二つ連続しないというのは、おそろしく徹底して行われているんですよ。そうであるにもかかわらず、ヤマイと読もうというのは、具合が悪いと思う。」
> 『邪馬台国論争に決着がついた』安本美典

「邪摩惟」は「ヤマユイ」と読むべきであろう。李賢はここに初めて日本人が使っていた日本語の国名を紹介した。「山結」。これが倭人が使った倭国名である。

「山結」とは何か

三世紀日本列島に多くの弥生国家が存在したのは当然である。その中で魏と使者･通訳が往来したのは九州の３０国、中国大陸に正対する九州弥生国家である。この30国を総称して『倭人伝』は「倭国」と書いているが、我が国から云えばこの30国は「山結」と名乗っていた。「山結」が我が国の正式国名である。

「山結」は現在の行政区名では「みやま市」「玉名市」「山鹿市」「南関町」「長洲町」「玉東町」「荒尾市」「和水町」「大津市」「菊陽町」「合志市」「益城町」「嘉島町」「御船町」「甲佐町」「美里町」「山都町」「西原村」「高森町」「菊池市」「宇土市」「宇城市」「八代市」「熊本市」に当たると思われる。

これらの市町村に存在した22の弥生国家が同盟を結び、「山結」と名乗った。「山結」は22人の男王によって運営された連邦国家だった。やがて、連邦内の争いが勃発して連邦が危機に陥ることになると、連邦の王たちは打開策をもとめ、外から一人の幼い女子を迎えた。その女子を連邦の王に共立した。彼女は祈祷に優れており、「ヒミコ」と呼ばれた。

『倭人伝』『後漢書』は「倭国」の乱を次のように伝える。

* 其国、本亦以男子為王往七八十年倭国乱相攻伐歴年乃共立一女子為王名曰卑弥呼
『倭人伝』
* 桓霊間倭国大乱更相攻伐歴年主無有一女子名曰卑弥呼年長不嫁事鬼神道能以妖惑衆於是共立為王
『後漢書』

「倭国乱」は「一国内の乱」のことではない。「山結22国」間の乱のことである。『後漢書』は「倭国大乱」と書き換えている。「大乱」とは本来中国天子に対する乱をいうが、『後漢書』の「倭国大乱」も同じ用法で、「連邦国王に対する乱」という意味で使っている。

「山結」連邦王の在位が70～80年間続いた。この期間の男王は一人と考えなくてよい。幾人かの男王が在位した。ところが、在位中に「山結22国」の王の結束が乱れ、一部の王が連邦王に反乱した。これが「大乱」である。そして、連邦王を決めることができず、連邦王不在のまま「歴年」、10年程過ぎた。そこで、「山結２２国」の王は女性で祈祷に優れた卑弥呼を迎え、連邦王に共立したのである。
連邦内再び平和を取り戻した。ただ、「狗奴国」の王だけは卑弥呼就任に反対した。そして、「狗奴国」は連邦を離脱した。

「山結」の王

では、22国の男王とはどのような王だったのか。確かな史料はない。だが、幾つかの手がかりはある。女王連邦２２国に特徴的な国名がある。「鬼」である。

次に鬼國あり。次に鬼奴國あり

「鬼国」とは、「忌（姫）国」である。同じく、「鬼奴国」も、「忌（姫）土国」であろう。これらの国は「忌（姫）氏」の国である。「鳥奴国」は「宇土国」であるが、「宇」も姫氏一族の王である。倭国２２国の王は「姫氏」と考えることができる。だが、王は「姫氏」だけではない。もう一つの特徴的な国名がある。「蘇」である。

次に対蘇國あり。次に蘇奴國有り。次に華奴蘇奴國あり

「蘇」とは、「熊氏」の祖国、「楚」であろう。『記紀』では「熊襲」と表している。この国の王は「熊氏」である。「姫氏」は紀元前五世紀祖国呉の滅亡によって九州に渡ってきた呉の王家一族である。「熊氏」は「姫氏」に遅れること２００年、同じように祖国楚の滅亡後九州に渡ってき

た楚の王家一族である。代々王は「熊」と名乗った。「熊」は王家の栄光の名前なのである。

「山結」は「姫氏」の王と「熊氏」の王が連携して立国した特異な国だったと考えられる。22国は男王とその一族が治めていた。そして、連合の王として「姫氏」、あるいは、「熊氏」の王を立てたのであろう。だが、連合国の王に「姫氏」の王を擁立すれば「熊氏」が従わず、「熊氏」の王を擁立すれば「姫氏」が納得せず、ゆえ、「姫氏」「熊氏」間の内戦が勃発、10年ほど続いた。そこで、外部から「卑弥呼」を招聘して連邦王に共立し、連邦の安泰を図ったという訳である。
このような政治的な理由で「卑弥呼」が共立されたのであるが、他にも社会的な理由があったと思われる。『倭人伝』によれば、連邦国は「婦が4，5人」という家母長制社会である。「卑弥呼」が連邦王に迎えられたのは、弥生の家族制度にも理由があるのではないだろうか。
家父長制社会では「男王」が立ち、家母長制社会では「女王」が立つ方がうまくいく。時代の家族システムが王の存在を規定するといえるであろう。

「山結」結成の要因

ところで、「山結」は全部で30国であるが、「狗邪韓国倭地」「対海国」「一大国」「末盧国」「奴国」「不弥国」「投馬国」には王が存在していない。行政官のみが存在した。行政官の設置者は22の連邦国であろう。
「狗奴国」は本来は連邦の一員であったが、その王が卑弥呼とは不仲となった。故、連邦を離脱した。今は「狗奴国」を除く21国の王が北は「狗邪韓国倭地」から南の「投馬国」までの「山結」全体を統治している。
連邦の首都は「邪馬国（山国）」に存在した。故、連邦は「邪馬国（山国）を中心とした結＝邪馬結（山結）」と呼ばれた。
「山結」は政治同盟、軍事同盟、氏族同盟である。だが、それだけが要因で「結」が形成されたのであろうか。他に22国を結びつける要因があったのではないだろうか。弥生にタイムスリップして考えて見よう。

『魏志東夷伝弁辰条』に次の記録がある。

> 国出鐵韓濊倭皆従取之諸市買用鐵如中国銭又以供給二郡
> 国（弁辰）は鉄を出し、韓、濊、倭皆従って（弁辰の指示に従って）これを取る。諸市で買うに皆鉄を用いるは中国の銭を用いるが如し。また以て二郡にも供給す。

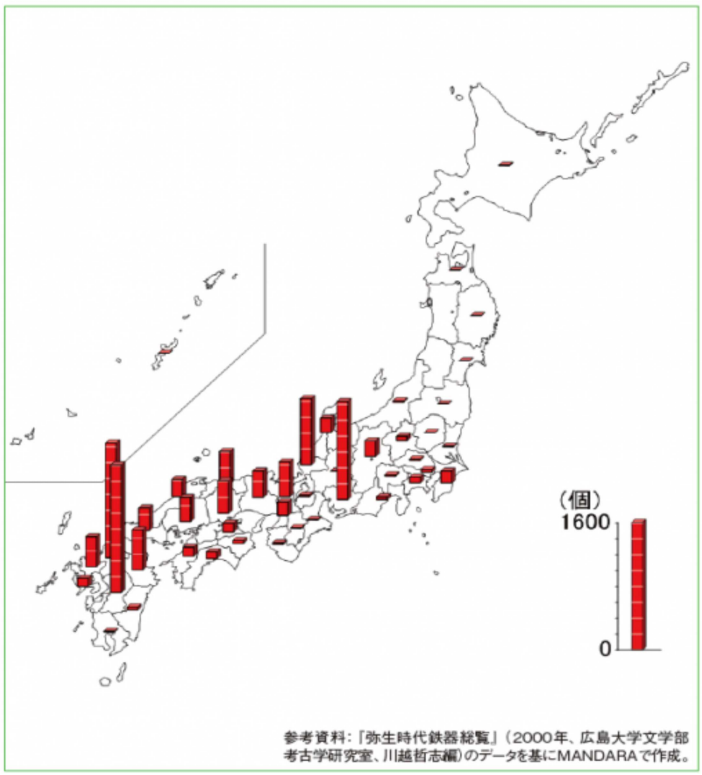
この「倭」とは「狗邪韓国の倭人」であろう。「韓」「濊」「倭」皆韓半島の国である。「弁・辰」には鉄が出る。この鉄が貨幣として使用されている。
では、鉄が貨幣として使用されるほど貴重な弥生世界の中で熊本県はどうだったのであろうか。熊本県は鉄器の一大産地だったことが知られている。以下、「Mapple Travel Guid」で紹介されている熊本県の弥生鉄器について見てみよう。

> **熊本では弥生時代の鉄器が多数発見されている**
> 1955（昭和30）年、熊本県玉名市天水町尾田の斉藤山（さいとやま）遺跡から、弥生前期初頭の土器と共に鉄の斧の破片が発見され、紀元前3世紀頃には日本に鉄器が存在していたことが確認され、日本最古の鉄器とされていました。その後、1979（昭和54）年に発掘調査が始められた福岡県糸島郡二丈町（現在の糸島市二丈石崎）の曲田遺跡から、紀元前3～4世紀の板状鉄斧が発見され、日本最古の鉄器の座を譲り渡すこととなりますが、熊本県からは実に多くの鉄器が発見されています。

弥生時代の遺跡からの鉄器の出土数（県別）

『弥生時代鉄器総覧』によると、熊本県の弥生時代の鉄器の出土数は合計1607点にも及びます。
これは、表を見ても明らかですが、第2位の福岡県の1445点を超える数で、他の地域をはるかに凌駕しています。

▶弥生時代の遺跡からの鉄器の出土数（県別）



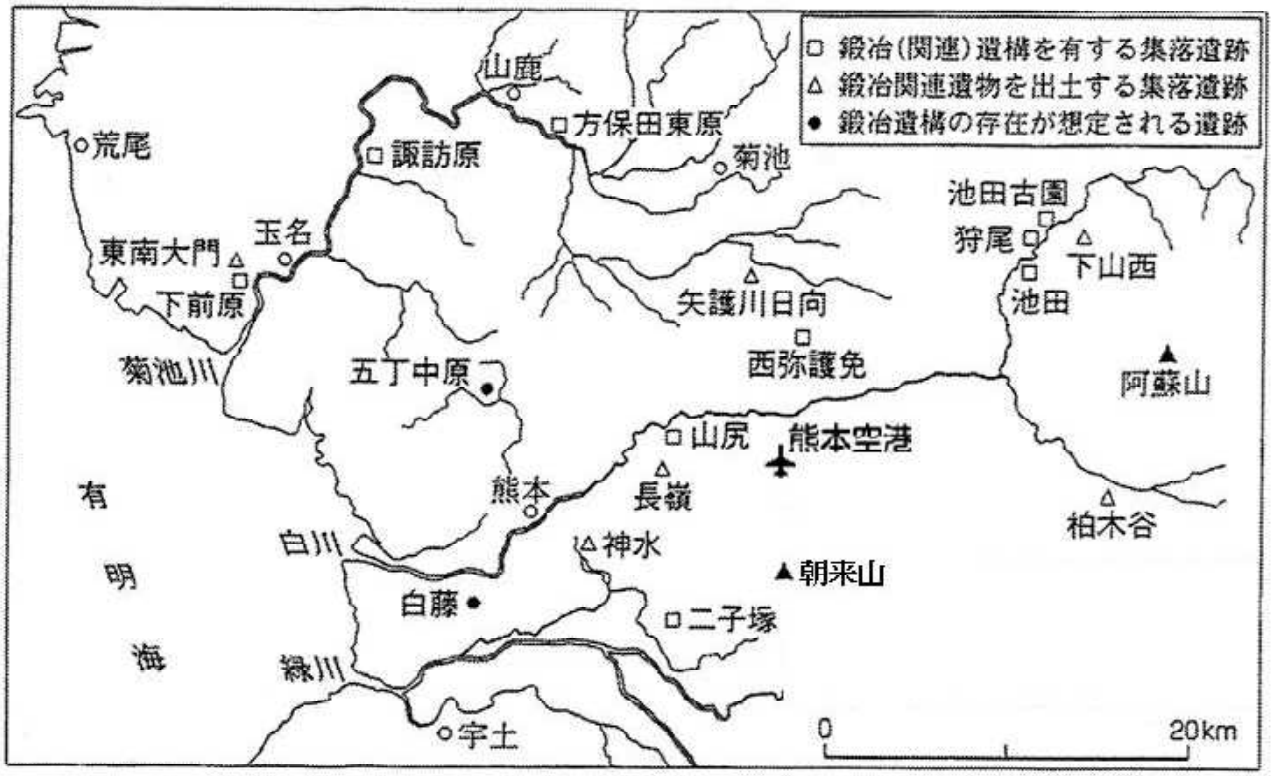
熊本の弥生時代後期では一般的に鉄器が普及

当時、鉄器は非常に貴重なもので、日本には生産する技術はなかったと考えられており、斉藤山遺跡や曲り田遺跡から発見された鉄器の材料となった鉄は、中国大陸で鋳造されたものが日本に渡ってきたものだろうとされています。しかし、その後、日本にも鉄そのものをつくる技術が伝わってきました。たとえば、西弥護免遺跡（菊池郡大津町大字大津）や方保田東原遺跡（山鹿市方保田字東原）からは、大量の青銅器と共に鉄器が発掘されたほか、鉄器工房跡も発掘されています。方保田東原遺跡は、熊本県北部の菊池川とその支流の方保田川に挟まれた標高35mの台地上に広がる、弥生時代後期から古墳時代前期に繁栄した大集落の跡です。さらに時代が進み、弥生時代後期になると、阿蘇カルデラ周辺にも多くの人々が住みつくようになり、そのあたりの遺跡からも鉄器が数多く発見されるようになります。たとえば、阿蘇市狩尾（かりお）の狩尾遺跡群（湯ノ口遺跡、方無田（かたむた）遺跡、前田遺跡、池田古園遺跡）では多くの住居跡から、鏃や棒状の鉄片や扁平な鉄片が発見され、当時としては貴重なものではあったものの、一般的に鉄器が普及していたことがわかってきています。また、阿蘇市三久保（みくぼ）の下扇原（しもおうぎばる）遺跡で約1500点もの鉄器が出土したほか、阿蘇郡高森町の幅（はば）・津留（つる）遺跡からも約700点の鉄器が出土しており、弥生時代の熊本県はかなり早い時期から、日本有数の鉄器の生産地であり、最先端技術を誇る職人集団がいたのではないかとされています。

弥生時代の熊本で鉄器生産が発達した理由

この地で鉄器の生産が発達したのは、周囲の阿蘇黄土から、鉄の材料となる褐鉄鉱（かってつこう）（リモナイト）が産出したためだと考えられています。人々はこれを元に赤色顔料であるベンガラを生成、他の地域と交易していたこともわかっており、それらの地では、褐鉄鉱を原料として鉄製錬が行われていた可能性も高いと指摘されています。

『熊本県の歴史』「弥生時代後期後半の主な鍛冶遺跡の分布」



鉄が結んだ「山結」

上図、鍛治遺跡が存在するのは女王国連邦22国の支配地である。阿蘇山の周りに鉄器製造遺跡が分布する。阿蘇は「鉄」の山である。この山を押さえていたのが「山結」である。
22国は鉄製錬、鉄器製造、鉄の販売を独占し、巨大な利権と富を手に入れていたと思われる。「鉄の同盟」とは比喩であるが、22連邦「山結」は本物の鉄の同盟、鉄によって結ばれた同盟であるといえよう。22国は鉄産業によって結ばれていたのである。

「山結」が「最先端技術を誇る職人集団」を擁していたのは当然であるが、鉄産業に関わる多くの職能集団もいたはずである。その中には交易を担当する「鉄の商人」もいたであろう。
卑弥呼の時代、韓国では鉄が貨幣の代替をしていたことは『魏志弁辰伝』で明らかである。彼らは連邦内は勿論のこと、韓国まで出かけていたことは遺跡からの出土品から確かめられる。

韓国市場は当時の国際市場である。韓国の市場では魏の商品は勿論、世界から魏朝に集まる数々の商品も売買されていたであろう。韓国内の商人はもとより、魏の商人、遠い世界の商人もいたことであろう。この世界市場に「山結」の鉄商人も参入した。

「アイアンロード」

鉄商人たちは「川尻」から出航した。川尻から筑後市へのルートが「水行1200余里」であることは既に述べた。だが、なぜ「陸行」ではないのか。「陸路」があったにもかかわらず、「水行」したその理由が「鉄」であろう。「鉄」「鉄器」を運送するには船が便利である。そして、唐津港から金海へはどのみち船である。

「山結」の商人たちは皆「狗邪韓国倭地」をめざした。「狗邪韓国倭地」は大陸貿易の窓口である。そして大陸文明の窓口である。「山結」はアジア最先端の文明をこの窓口から取り入れた。この窓を通して卑弥呼は魏朝を知る。

”　世界最先端の文明国は魏。魏の政治、文化、科学技術を知りたい　”

こうして、卑弥呼は、238年、第一回の「遣魏使」として、大夫「難升（南将）米」を派遣する。明帝は卑弥呼に、「親魏倭王卑弥呼に制詔す」から始まる256字の詔書を送る。卑弥呼たちはこの漢文が読めたのであろう。「狗邪韓国倭地」で中国貿易を行う商人は中国語が堪能だったに違いない。「山結」は「狗邪韓国倭地」を通して国際国家となっていく。

「女王国」と「狗邪韓国倭地」を結ぶルートは云うなれば、黄金の「アイアンロード」である。彼らは日常的にこのルートを往復し「狗邪韓国倭地」を拠点に交易した。「狗邪韓国倭地」は『倭人伝』ではさほど重要な所土地として描かれていないが、この倭地ほど「山結」の経済、文化にとって重要な土地は他にない。当時の日本列島の弥生国家で外国に居住区を持っていたのは「山結」だけである。

陳寿は、「倭地は五千余里」と書いた。倭地とは「狗邪韓国倭地」から「女王の都」への交通路である。このルートが五千余里である。このルートは「アイアンロード」である。「倭地は五千余里」は倭国と中国大陸を結ぶ一大交易路だったのである。

熊本市中央区京町から筑後市まで２日、筑後市から佐賀市まで1日、佐賀市から唐津市まで２日、唐津市から壱岐まで２日、壱岐から対馬まで2日、対馬から金海まで2日、計11日の旅である。これが「アイアンロード」の日数である。陳寿はこの道を魏使が通った外交ルートとして記述したが、本来、外交ルートではない。「狗邪韓国倭地」と「女王の都」を結ぶ水行･陸行ルートは「山結」の「王」「官」「民」が大陸との交易のために自らの手で切り開いた交易ルートである。
「山結」の交易は朝鮮半島の国だけではない。方保田東原遺跡からは山陰や近畿からの弥生土器が発見されている。勿論、土器だけが運ばれたのではない。土器に入れた商品を売買したのである。

山鹿市立出土文化財管理センター

「山結」は当時にあって中国、朝鮮との交易を重視した極めて異質な国だと言えよう。魏との積極的な外交もその一環である。国際貿易の基本通貨が鉄である。「山結」は日本列島随一の鉄生産国家でもあった。中国、韓国、東の近畿、山陰を結ぶ大動脈が「アイアンロード」だった。「一大率」を伊都国に常駐させ、狗邪韓国から伊都国間の「アイアンロード」の安全を担保した物流の大動脈なのである。陳寿旅程、つまり、この交易路の方角、距離に「誤記」など生ずるはずがない。
魏にとっては帯方郡から狗邪韓国倭地までの七千余里は自国領である。韓国帯方郡～狗邪韓国倭地の七千餘里は水行２日、陸行２８日の旅である。こうして、陳寿は「韓国」と「倭地」を併せた里程「萬二千餘里」と日程「水行十日陸行一月」を書くことができた。

阿蘇の弥生遺跡ではベンガラを生産していたと云う。女王国の商人たちは朱い船に乗って対馬海峡を往復していたのであろう。「朱船」が女王公認の証である。山鹿市方保田東原からは朱色の土器が出土している。ベンガラは多くの用途を持っている。そして、京町藤崎台に建つ卑弥呼の王宮、この王宮もまた朱色に輝いていたことであろう。

「邪靡堆」

唐李賢『後漢書』注「邪摩惟（ヤマユイ）」に関しては異論があり、それが主流である。「惟は堆の誤刻」というものである。つまり「邪摩堆だ」というのである。。
唐は「邪馬台」を「邪靡堆」に変更している。従って、唐における「今名」は「邪靡堆」である。
唐に「今名邪靡堆」はあっても、「今名邪摩惟」はない。故、誤刻と考えられることになる。
他の史料においても「今名邪靡堆」とするものがあり、それが誤刻の根拠となっている。

だが、この問題の本質はそこではない。本質は「邪靡堆」を「ヤマト」と読むところにある。つまり、李賢注は「今名邪靡堆」である。「今名邪靡堆」は「今名ヤマト」である。「邪靡堆」は日本語「ヤマト」である。

唐代、我が国の今の名は「邪靡堆（ヤマト）」である。

「今名邪摩惟」では「今名ヤマト」とは読めない。「惟」は「ト」の音にはならない。「邪摩惟は誤刻」とされる理由はここにもある。
こうして「邪摩惟」は「邪靡堆」と訂正され、「邪靡堆」は「ヤマト」と読まれる。

「堆」は日本語音「ト」の借字だ。

唐の時代、我が国の名は「ヤマト」である。

ほぼ全ての研究者はこのように主張する。こうして、「邪靡堆」は日本語「ヤマト」となる。確かに隋の時代から唐の時代には我が国からの遣隋使、遣唐使が中国を訪れ、我が国に対する認識も格段に拡大している。隋、唐が神武天皇家「ヤマト」を知ったとしても不思議はない。

「邪靡堆」は「ヤマト」という国名なのか？
『隋書』「倭国伝」は無論漢語で書かれている。総ての漢字一つひとつに意味がある。ところが意味の無い漢字も使われている。「借字」と言われるもので、日本語の音を漢字にしたものである。現代日本語でも、「ニューヨーク市」「シドニー港」「ゴビ砂漠」と表記する時、カタカナは外国語である。
正史「倭国伝」においては、「借字」は日本語である。借字かどうかの見分け方は、その一つの漢字に中国語本来の意味があるかないか、である。意味が無ければ借字である。
陳寿は22の国名を書いている。国名は、無論、日本語である。よって「借字」を用いた。「斯馬国」の「斯」「馬」は借字である。「斯（シ）」「馬（マ）」に漢字の持つ意味は無い。「斯馬」は「島」の借字だからである。

『隋書』「倭国伝」の借字はそれほど多くない。
国名:「倭国」「邪靡堆」「邪馬台」「倭奴国」「都斯麻国」「一支国」「竹斯国」「秦国」
人名:「卑弥呼」「多利思北弧」「阿輩雞弥」「利歌弥多弗利」

「邪靡堆」は次の文中に現れる。
　　都於邪靡堆則魏志邪馬台者也
　　都を邪靡堆、即ち、魏志の邪馬台である。

「邪靡」「邪馬」の「邪」「靡」「馬」に中国語の意味は無い。「邪靡」「邪馬」は日本語である。では「堆」と「台」はどうか。この漢字は意味の無い借字か、それとも、意味ある中国語か？

有名な青銅器文明の「三星堆」遺跡がある。その名は「三つの土盛りがオリオン星のように並んでいた」ことに由来すると言われる。この「堆」は「盛り土」の意味を持つ中国語である。
「邪靡堆」の「堆」は、「三星堆」と同じ用法で、「盛り土」の意味を持っている。だから『隋書』は「台」の代わりに「堆」を使ったのである。「台」も「堆」も同じ「盛り土」の意味を持つ。
「邪靡堆」は「邪靡」は日本語。「堆」は本来の意味を持つ中国語である。

「台」に関してはすでに多くの研究がなされている。「台」には多くの意味があるが、「中央官庁」「宮殿」の意味を持つ。「陵雲台」「九華台」の「台」は「宮殿」を指す。
「邪馬台」は「大倭王」の都の名として使われている。「台」は「宮殿」の意味をもつ中国語である。「邪馬」は日本語であるが、「邪馬台」は中国語である。
「邪靡堆」「邪馬台」は中国語である。「ヤマト」とは別の国である。

「邪馬台」

范曄は「其大倭王居邪馬台国」と書いた。「邪馬台」は倭国首都に対する呼称である。
「台」の使用法は日本語の「京」と似ている。「平城京」「藤原京」「長岡京」等、都を表す時「京」を使う。「邪馬台」は私たちにとっては「邪馬京」がふさわしい。

南朝劉宋は倭国首都に対して「倭台」としなかった。「倭国の首都」であるから「倭台」という呼称が自然である。だが、「邪馬台」とした。「邪馬」は「山(ヤマ)」という日本語である。
日本語「邪馬」に続いて「台」を「ト」と読めば「ヤマト」となる。卑弥呼の後を継いだ女王「台与」は「トヨ」である。「邪馬台」は「ヤマト」と読める。読めるが、南朝劉宋范曄たちが、「ヤマト」と言ったかどうかは別問題である。

南朝劉宋が首都名を「邪馬台」としたのは、劉宋の倭国の首都認識が具体的だったからである。
　　倭国の首都は「邪馬国」に存在する。
　　首都は「邪馬国」の「高台」にある。

「邪馬」は日本語「山」であるが、大事なことは「邪馬は国名である」という点にある。陳寿が「邪馬国」と書いたその国である。つまり、倭国の首都は「邪馬国」にあるというのである。
「ヤマト国」ではない。「ヤマ国」に首都がある、といっているのである。
「邪馬国」に台(中央官庁)がある。よって、南朝劉宋は「ヤマタイ(ヤマダイ)」と言ったのである。

「邪馬台」は首都名である。范曄はこの首都名を使って「邪馬台国」とした。「邪馬台を首都とする国」という意味である。日本の首都名は東京である。この首都名を使って「東京国」としたようなものである。「北京国」「ソウル国」、これでも分からないことはないが、正式な国名はこれで

はない。「邪馬台国」はこれで通じないことはないが、国名としてはふさわしくない。

范曄は「其大倭王居邪馬台国」と書いた。この文は「其大倭王居（首都である）邪馬台」と書く方が的確だったのである。或いは、「其大倭王居（首都のある）邪馬国」と書けば、首都名は「邪馬台」、国名は「邪馬国」と理解できたのである。
ところが、「邪馬台国」と書いたため「首都名」が「国名」へと変化してしまい、「邪馬台国」が存在するかのように受け止められてしまった。

南朝劉宋の使者は「邪馬国（熊本市中央区京町）」の茶臼山の大倭王の都を訪れ、その見聞にもとづいて、都の名を「邪馬台」と作った。
奇しくも、「邪馬台」は「中央区京町」である。中国語「台」と日本語「京」が偶然一致する。
もし、范曄の「其大倭王居邪馬台国」を日本の読者に分かりやすく翻訳するとすれば、「邪馬台」は「山京」として「倭国連邦の大王は山国の京に居る」となろう。

陳寿原本の倭国名

陳寿が書いた連邦30国の名前は倭語である。倭語ではあるが、中国語借字で書かれているため読解は困難で、その全てを解読できているわけではない。『倭人伝』国名をいかに読むのか、今後の課題である。だが、私たちが日本語として解読できる国名もある。「島国」「土国」「山国」などである。このような地形等に由来する国名以外にも、「宇土国」「姫国」など、王の名に由来する国名も解読できる。

今、私たちが見ている『倭人伝』は南宋によって作られた刊本『紹熙本』（1190年～1194年）である。南宋は倭国名を「邪馬壱国」と作っている。「邪馬壱国」は南宋の創作である。

南至邪馬壱国女王之所都水行十日陸行一月

「邪馬壱国」が陳寿の倭国30国のなかに無いのはすでに見てきた通りである。陳寿は原本で、「邪馬壱国」と書けたはずはない。では、陳寿はいかに書いていたか、考えてみたい。

(1) 三世紀、卑弥呼の国は22の王国によって構成された連邦国家であった。連邦の首都は「邪馬国」にあった。故、連邦は「邪馬結」と呼ばれた。
(2) 倭国連邦の首都は「邪馬国」の茶臼山にあった。故に、五世紀南朝宋はこの首都を「邪馬台」と呼んだ。
(3) 七世紀李賢は「邪馬台国」に対し「今名は邪摩惟」と注釈した。
(4) 十二世紀南宋は刊本『倭人伝』において倭国名を「邪馬壱国」とした。

これらの国名において、三世紀の陳寿が知り得た国名は一つだけである。「邪馬惟」である。
「邪馬惟（山結）」は陳寿以前に存在していた。陳寿は「倭国は連邦である」という認識を得ていた。当然その連邦名も知っていたであろう。従って、陳寿は次のように書いていたと考えられる。

南至邪馬惟女王之所都水行十日陸行一月
（不弥国）南邪馬惟に至る。女王の都とする所は水行十日陸行一月

不弥国南至邪馬惟

三世紀、西晋の陳寿には倭国に関する重要な情報が二つあった。一つは倭国３０国である。３０国の主要な国の名、官、戸数を書くことができた。
もう一つは、連邦22国である。22人の男王は同盟を結び、連邦の王を共立する政治体制を作っていた。卑弥呼もその連邦王の一人である。当然、この連邦を表す正式国名があった。それが「邪摩惟」である。日本語では「山結」である。

「山結」は李賢が『後漢書』に「邪摩惟」として注記して私たちが知るところとなった。李賢は、唐の時代の倭国の自称として「今名邪摩惟」と注釈としたが、「邪摩惟」自体はずっと古く三世紀にはすでに存在していたと思われる。倭国が百余国あった時代から統一されていく過程で連邦が形成されたと思われる。
三世紀、西晋陳寿の時代には戸数七万の大国になっている。戸数七万とは「山結」がいかに豊かな国であったかを示している。
有明海という豊穣の海。阿蘇山の鉄とベンガラ。狗邪韓国倭地拠点の中国との交易。近畿との交易。山陰との交易。「大工」「小工」の技術者。稲作。養蚕。22の男王による連邦制。連邦王の共立。いずれも当時最先端の産業、商業、貿易、国家体制、国家運営といえよう。
「山結」は政治的、経済的に最も進んだ日本最大の国家だったのである。

陳寿は連邦の存在を知っていた。その連邦が何と呼ばれているか、それも知っていたにちがいない。

”連邦はヤマユイと呼ばれている”

陳寿は『倭人伝』にこの連邦名を書いた。倭国のこの特異な国家体制を記録しなければならない。この連邦を治める女王卑弥呼の首都にも言及しなければならない。

（不弥国）南至邪馬惟。（従郡）女王之所都水行十日陸行一月

陳寿は「南邪馬惟」と書いていたとすると、文意は整合する。

(1) 不弥国のすぐ南に存在したのは「斯馬国」である。その「斯馬国」は連邦の始まりである。従って、陳寿は「不弥国の南に山結が存在する」と書いた。つまり、「南至邪馬惟」である。
里を書かなかったのは連邦は不弥国の南に接するからである。22国の里は書けない。
(2) 「女王の都」と「邪馬惟」とは異なる概念である。「都」は実存、「邪馬惟」は観念。
従って、二つを分け、別々に書いた。
(3) 陳寿は「邪馬惟」は知っていた。だが「女王の都」については場所も里程も知らなかった。「水行十日陸行一月」は倭国の情報である。
(4) 戸数七万余戸は「山結22国」の総戸数である。一国の戸数平均は3500戸となる。

日本語倭名と中国語倭名

狗邪韓国倭地から投馬国までの３０国の連邦国家を中国は「倭国」と呼んだ。「倭国」に対する日本語名と中国語名を区別して整理しておこう。

（1） 三世紀、西晋陳寿は『倭人伝』で倭国を「邪馬惟」と書いていたと思われる。
「邪馬惟」とは連邦国家を意味する日本語「山結」である。
（2） 五世紀、『後漢書』「邪馬台」は南朝劉宋が作った中国語の倭国首都名である。
中国語「台」は日本語の「京」に通じる。「邪馬台」は「邪馬京」と表記した方が私

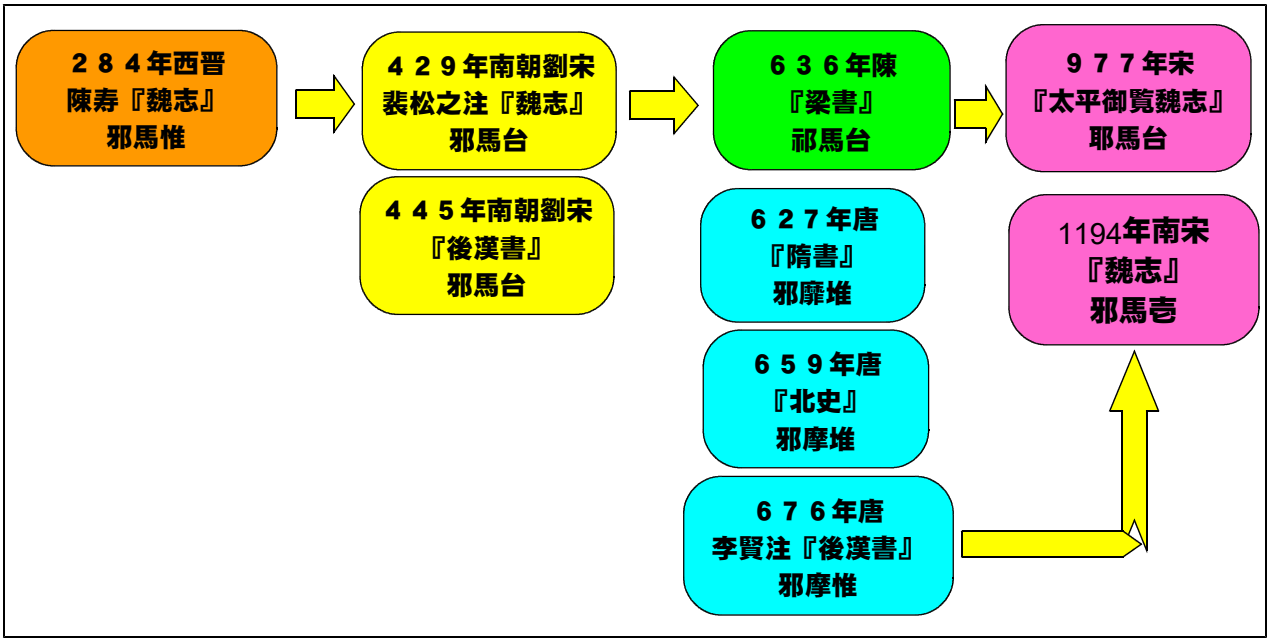
たちにはピタリとくる。倭国の「京」は「邪馬国」にあった。

（3） 五世紀、裴松之は『倭人伝』を注記する際、倭国首都名を「邪馬台」とした。以後『倭人伝』の倭国首都名は「邪馬台」となった。

（4） 七世紀、唐は「邪馬台」を「邪靡堆」と書き換えた。「邪靡堆」は日本語「ヤマト」ではない。中国語である。

（5） 七世紀、陳『梁書』「邪馬台」は裴松之注『倭人伝』の引用であろう。

（6） 七世紀、唐李賢注『後漢書』「邪摩惟」は倭人自称の連邦国家名、日本語「山結」である。

（7） 十世紀、宋『太平御覧魏志倭国伝』では「邪馬台」である。「邪馬台」は『後漢書』の倭国名の踏襲である。

（8） 十二世紀、南宋『倭人伝』「邪馬壹」は南宋が作った倭国名である。「壹」は「台」の誤刻ではない。南宋は承知の上で「壹」と作った。その典拠となったのは、唐李賢注の「邪摩惟」であろう。「惟」を「イ」と読んで、「邪馬壹（ヤマイ）」とした。